
ブレイブアース

あんみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイブ アース

【Nコード】

N0029L

【作者名】

あんみつ

【あらすじ】

この世界の人々は、狩猟や交易、農業を中心にして暮らしている。そんな世界の片隅に存在する小さな島に大きな夢を抱いた一人の青年がいた。

青年の名前はジエクト。

彼は偉大なハンターになるという夢を叶えるため、村の酒場でいつ

もくつろいでいる村長のもとを訪れる。

ハンター稼業はいつ命を落とすかわからない危険な仕事。

それでも、ハンターになる者が後を絶たないのはこの世界に数々の伝説があるからだろう。

世界各地の伝説を求め今日も一人のハンターが生まれる。

世界はただ静かに新たなハンターの誕生を祝福する。

世界の名は、アストラルヴ

プロローグ

蠟燭が数本揺れているだけの薄暗い空間に二人の声が響いた。

「ガハハハハハ！お前のところにも、ようやく子供が産まれたみたいだなあ。で、男か！？女か！？」

歳は20代半ばといったところだろうか。豪快に笑ったのは、精悍な顔立ちに、黒い長髪を頭の後で一本に結った体格の良い男だ。

「男の子だよ。手紙にそう書いてあった。」

もうひとつの声が答える。

こちらの男も負けず劣らず精悍な顔立ちをしているが、右目に二本の傷痕がある。髪は黒く短めで、全体的に逆立ってる。かなり迫力ある顔だが、その顔は息子の誕生で緩みきっている。

「早いとこ依頼を片付けてシモン島に帰ろうぜ。お前も早く産まれた息子に会いたいだろ？なあ、バツツ」
「どうやら、顔に二本傷のある男はバツツというらしい。」

「お前だって、イーリスちゃんに早く会いたいだろうが、ザイ。今年で2歳だったか？」

バツツはニヤニヤと笑いながらザイに聞き返す。

「まあな。レンにも会いたいし、お前だってサクラちゃんにお土産持って帰るんだろ？」

レンとサクラとは二人の妻のことだろう。

「まあな。……ザイ。そろそろ、ヤツが動きだす時間だ。」

「了解。さつさと片付けますか!！」

バツツは大剣を背負い、ザイは鶴翼を身につけて立ち上がる。

鶴翼とは巨大な盾と剣がひとつになった外見をしている攻防一体の武器である。

二人は蠟燭の火を消し、洞穴を出ていく。朝陽を受ける二人の背中
は、まさに歴戦のハンターのそれであった。

二人は腕をぶつけ合う。

「狩りの始まりだあ!！」

第1部

ここは世界の南東に位置し、大小様々な島が存在する常夏の楽園。シモン諸島である。

ここは常夏といわれている通り、温暖な気候に恵まれた。

気候のせいだろうか、このシモン諸島には、ここでしか見られない固有生物が数多く棲息している。

舞台となるのは、このシモン諸島のほぼ中心に位置する、諸島の中で一番大きなシモン島。

このシモン島は一周が約380キロもあり、島の大半が密林に覆われている。島の南東には多くの入り江が存在していて、その入り江のひとつにこの島唯一の村、ウルファン村がある。

5

今、一人の青年が意気揚々と村の酒場を目指していた。

「やっとだ。やっとハンターになれる日がきたぜ！！この日をどれだけ夢見てきたことか。くうくうくう。たまんねえ！！」

青年の名前はジェクト。彼の黒髪は後方に逆立つように伸び、肌は健康的に焼けていた。南国で育ってきたことが一目でわかる容姿をしている。

「俺もやっとな正式なハンターかあ。俺がハンターの真似事を始めてから、もう10年も経つんだなあ。」

このアストラルヴという世界には、ハンターと呼ばれる者たちがいる。彼らは所謂、冒険家のようなもので、世界各地を渡り歩きながら魔獣を狩ったり、街や村、果ては個人で出されている依頼を請け負ったりしながら生活している。中には一カ所に腰を据えて、その周辺で狩りや依頼をこなす者もいるのでハンターが皆、冒険家であるとは一概に言えないのだが。

ハンターになる条件はそんなに難しいものではない。18歳以上であり、何が起きても全て自己責任であることに同意すれば誰でもハンターになれるのだ。

この日、18歳になったばかりのジエクトはすぐに酒場を目指したのであった。

「ようジエクト!!お前これから長老のところに行くのかあ?」

話し掛けてきたのは、ジエクトと仲の良い村の漁師だった。

「おう!!俺もようやくハンターの仲間入りだぜ!」「ようやくかあ……じゃあ、すぐにでも大陸に渡るのかあ?」

「いや、当分は諸島巡りで力を付けてくつもり。今までは小物しか相手に出来なかったけど、ようやくデカイのともやれるからな!!油断してると喰われかねえよ」

「そうかあ。諸島の魔獣はピンからキリまでいるからなあ。腕を磨くにはもってこいの場所だな。……そうそう、言うの忘れてたが、イーリスちゃんが捜してたぞ?」

「げっ!?マジかよあ……。あのやろつ。酒場に行く前に捕まっちゃまったら終わりだぜえ……。はあ」

「ははははは!相変わらず、尻に敷かれてるみたいだなあ。まあ、あの娘なりに心配してんだろつさ。ハンターに危険は付き物だからなあ」

「知るかよあ……。それにあいつだつて、もう一端のハンターじゃねえか。とやかく言われたくねえつての」

「正式なハンターだからこそ、危険だつてのがよくわかってるんだと思うぜ?」

「……この話は終わり!!俺は、さつさと酒場に行つて手続きしたいんだからさあ。あ、もしイーリスが来たら釣りにでも行つたつて言つといてくれよ。じゃあ、また後でなあ!!」

「……。たく、せつかちなヤツだぜえ。誰に似たんだかあ。にしても、親子揃つてハンターとはなあ。血は争えないつてやつかねえ」

まだ、昼間だということもあつて酒場の中には数名の客がいるだけ

であった。村の者は何かしらの仕事をしているため、必然的に酒場の客はほぼハンターだということになる。

ギイイツ、という音立てて両開きの扉が押し開けられ、一人の青年が入ってきた。ハンターたちは一瞬目を向けるが、すぐに各々の会話に戻る。

青年は周りも気にせずに、まっすぐカウンターを目指す。カウンターには一人の老人が腰掛け、ウエイトレスと話をしていた。

「やはり来おったかぁ・・・お前も親父の後を追うつもりか、ジエクト？」

振り返りもせずに話し掛けてきた老人は、髪や髭こそ白くなっているが、その辺りのハンターに引けを取らない程の体躯をしていた。

その身体に刻まれた無数の傷痕から、この老人がかつては、いくつもの修羅場を乗り越えたハンターだとわかる。

「ああ。親父は偉大なハンターだったんだろ？なら、親父と同じ道に進みたいってのは、当然の夢だと思うんだけど？」

「そうか。・・・かなり険しい道になるぞ？」

「覚悟は出来てる」

「・・・よかるう。気持ちがあまっているのなら、存分にその力を奮え」

先程まで険しい表情をしていた老人は、まるで孫を慈しむような優しい表情に変わった。

「流石、長老！！話がわかるぜ。……ありがとな、じっちゃん」

この老人はどうやら、ウルファン村の長老らしい。

「さつさと、手続きを済ませるぞ。ウエンディちゃん！！誓約書を持って来てくれんか？」

「ハイ！！少し待っててねえ。」

今までカウンター越しに話を聞いていたウエイトレスのウエンディが店の奥に引っ込む。

と、その時だった。

バンツ！！という物凄い音を立てて扉が開け放たれた。

「くうおらああああ！！ジエクトオオオオ！！」

開け放たれた扉から入って来たのは女性であった。

「あらあらあ。……ジエクトくんご愁傷様あ」

ちょうど誓約書を持って戻って来たウエンディの音が、ジエクトにはどこか遠くから聞こえているようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0029/>

ブレイブアース

2010年10月28日04時18分発行